

下山のとき

小林守城

安寧の日は安心して下痢ができる日のこと
叙勲の日に強い下痢だったらどうする
天皇の前で下痢に耐えている
叙勲の人の苦悶の表情を見せられるか
それは自裁の人生の表象のようだ
たとえ恥辱の花火であつても
下賤とはだれにも言わせないが
その位置は変わらないだろう

ようやく下山する時が来たようだ
安寧の日をめざして
晴れがましい頂上の見はらしはない
誰にも彼にも安心の隠れ家の廁が
いつでも用意されていること
人知れず下痢を肥やしにして生き還る
「ただの人」として生けるものの
幼児のように柔らかいうんこを
新しい他者としていじくるところ
駄目よと言つて母親が
きれいに腐れ縁を拭ってくれたところ
洗面器の中のさびしい音よ
しゃぼりしゃぼり
女の放尿 金子光晴だったかな

3. 11以降 日本は裏返しになった
ふたたび宮沢賢治や谷川雁の言霊が
生き還ってくる時だ
雨にも負けず 下部へ根源へ
何処までも下山してゆこう
暗く渦巻くいのちのエネルギーを組織し
天空へ虹のように ゲリラのように
ほとぼしるいのちをほのぼのと
始末してくれる廁を創るときなのだ